



令和8年6月18日

報道関係者各位

国立大学法人北海道国立大学機構
帯広畜産大学

**パンデミック期の小規模博物館における教育活動を調査
～欧州リトアニアの首都ヴィリニウスにおける事例研究～**

【リリース概要】

帯広畜産大学人間科学研究部門の木村文准教授は、COVID-19 パンデミック期における小規模博物館の教育活動について、その実態を調査した研究成果を発表しました。パンデミック下の博物館をめぐっては、デジタル活動への転換によって危機を乗り越えたという「定説」が広く語られてきました。しかし、こうした語りの多くは、潤沢な資源を持つ大規模博物館の報告に基づいており、脆弱な小規模博物館の経験は見過ごされてきました。本研究では、リトアニアの首都ヴィリニウスに位置する小規模な記念博物館6館の専門職員への半構造化インタビューを通じて、教育活動がパンデミックの危機下においてどのように変化・適応したのかを質的に分析しました。その結果、小規模博物館が制度的な脆弱性ゆえに直面した固有の困難と、限られた資源の中で生み出された工夫が明らかになりました。

【解説】

新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、世界中の博物館は来館者の受け入れを停止し、オンライン活動への転換を迫られました。この時期の博物館研究は、主に米国などの大規模博物館の事例に基づいて蓄積されてきましたが、世界に9万5千館以上存在する博物館の大多数を占める小規模館の経験は、十分に記録されてきませんでした。本研究は、2024年3月、ヴィリニウス市内の小規模記念博物館6館の専門職員を対象に半構造化インタビューを実施し、質的内容分析(QCA)を行いました。分析の結果、職員の語りは「教育」「バックヤードの業務」「その他の隔離期間中の経験」の3つの主要カテゴリーに分類されました。それらの分析をもとに、主に3つの知見が得られました。第一に、資金難の施設における不安定な雇用のために、小規模博物館の経験が失われやすいことが分かりました。6館のうち2館では、パンデミック期の職員が完全に入れ替わっており、当時の危機対応の経験を辿ることができなくなっていました。第二に、危機を乗り越える戦略が施設の規模や資源によって大きく異なり、オンライン教育や教員ネットワークの活用度合いに差が見られました。第三に、収蔵資料の管理やデジタル化といった「舞台裏」の業務に、制約の中で生まれた創意工夫がありました。

【研究の意義】

本研究は、これまで見過ごされてきた小規模博物館の視点から、危機下における博物館の適応に関する具体的な知見をもたらすものです。大規模博物館に由来する「ベストプラクティス」が、必ずしもすべての博物館に当てはまるわけではないことを示し、パンデミック期の博物館像をより包括的に捉え直す必要性を提起しています。とりわけ、不安定な雇用が施設の記憶そのものを消し去ってしまうという問題は、文化機関が抱える構造的な不平等を浮き彫りにするものです。これらの知見は、将来起こりうる危機に対して、規模の大小にかかわらずすべての文化機関が備えられるようにするための、政策や研究のあり方に重要な示唆を与えています。

【発表雑誌】

Acta Humanitatis, Volume 4, Issue 1 (2026): 4-25

論文 DOI: <https://doi.org/10.5709/ah-04.01.2026-01>

論文 URL: <https://actahumanitatis.com/index.php/journal/article/view/57>

掲載日: 2026年6月7日

(本論文はオープンアクセスで全文公開されています。)

【論文名】

Educational Experiences in Small Museums During COVID-19: Six Memorial Museums in Vilnius, Lithuania

【著者】

木村 文 帯広畜産大学 人間科学研究部門 准教授

【特記事項】

本研究は、日本学術振興会科研費基盤研究(若手) 23K12317 の助成を受けて実施されました。

【連絡先】

帯広畜産大学 人間科学研究部門 准教授

木村 文

TEL: 0155-49-5603

E-mail: akimura@obihiro.ac.jp